

ぼくのロボット

守口小学校 三年 川ばた りょうすけ
ぼくには、ほしいロボットがあります。その名も「PIR」(PプロフェッショナルIはいぼうRロボット)です。きのうは三つあります。

一つ目は、いっしょにおにごっこやしうぎをしてくれるきのうです。今年はとくに、友だちと思いつきり遊ばせません。どこかに出かけることもできません。だから、PIRがいると、いつでも楽しく遊べます。お父さんになかなか勝てないしうぎも、PIRとこっそりひみつのとつくんをします。そして「いつのまにこんなに強くなったの?」と、びっくりしたお父さんに言ってほしいです。

二つ目は、お母さんのイライラ度がわかるきのうです。PIRのおなかにメーターがついていて、色でお母さんのきげんがわかるようになっていきます。黄緑はニコニコです。ピンクは、つかれているのでおちゃを持っていくと黄緑にもどります。オレンジはちゅういんです。こんな時は早めにべん強を始めるのがコツです。赤はけいほうです。まもなく大ふんかがおきるじょうたいなので、そっと部屋を出てほっておくのが一番です。ぎやくに、ぼくのきげんがわるい時でも、お母さんはす

ぐにだきついてきます。ふだんはいいけど、きげんがわるい時はやめてほしいです。だからぼくのきげんメーターもついていたらべんりだと思えます。

三つ目は、アイデアやヒントを出してくれるきのうです。ぼくは、工作や絵があまりとくいではありません。「ここはこうしたらいいよ」と、アイデアを出してくれたり、いっしょに作って、上手になるポイントを教えてくださいます。そんなきのうがついているPIRは友だちにもなるし、力になってくれる、まさにりそうのロボットです。

この本の主人公は、弟のロボットを手に入れました。ぼくは、ぼくの力になってくれるロボットがほしかったけど、弟ロボットだとそういうわけにはいきません。おもちゃやおかしをがまんしないといけないし、お母さんのおひぎもがまんしないとけません。べん強を教えたり、弟を守ってあげないといけません。ぼくがPIRのようになって弟の力にならなくてははいけません。この本を読んでそれは、ぼくのお姉ちゃんがぼくにしてきていることばかりだと気づきました。ぼくなら、主人公のように弟ロボットがいやになっ

べん強も教えてくれて、遊んでくれて、ぼくを助けてくれます。お姉ちゃんはロボットではないけれど、ぼくにとってのPIRはお姉ちゃんだったのです。そして、ぼくももう少しお姉ちゃんの力になって、助けてあげられるようになりたいです。

ポリぶくろ、一まい、すてた

梶小学校 四年 前原 崇人

今年は新型コロナウイルスのため休校になり、四年の一学期が短かったけれど、社会の時間にごみについて学びました。宿題で、一週間のごみを調べました。ぼくの家は、生ごみなどの燃やすごみとプラごみが多くて、プラごみは持ち上げると軽いけれど、一週間の食料品やアイスとおかしのぶくろで、ごみぶくろがいっぱいでした。社会では、アメリカに続いて日本がプラごみ世界二位のことやウミガメが海の中のビニールぶくろのごみをえさとまちがえて食べて死んでしまったこと、守口市はごみをしよ理するのに、一年間に十六億円もかかっていることを知りました。ぼくは、すごい金がかくびっくりしました。それから、ごみの量をへらすには、どうしたらいいのかを考えました。

この本のアイサトは、アフリカのガンビアという国のンジャウ村に住む女の人です。頭にのせていた大きなかごがこわれて、アイサトはポリぶくろをはじめ拾い、やぶれたら、一まい、二まい、ついに百まい地面にすてました。アイサトは大人になって、おばあちゃんや村人のたくさんのヤギがポリぶくろを食べて死んだことを聞きました。そして、ごみ

の山からポリぶくろを百まい持って帰り、友だちと五人で洗ってほしてかわかして、細く切ったひもと、かぎばりを作って、ポリぶくろのさいふをあみました。市場では、はじめはみんなわらったけれど、ひとりがさいふを買うと、つぎつぎにみんなが買って、新しいヤギを一ぴき買えるお金ができました。やがて、村のごみの山が小さくなりました。

ぼくが心に残ったのは、アイサトが自分でなんとかしようと、かが飛び回っているごみの山から、ポリぶくろを拾って、友だちとさいふを作る場面です。道具を買わずに、ほうきのえをけずって、かぎばりを作ろうと考えるところが特にすごいです。みんながわらっても、四人の友だちがいっしょに手伝ってくれたからアイサトは負けなかったし、市場で女の人が最初に勇気を出して、さいふを買ってくれたから、ポリぶくろのリサイクルがせいこうしたと思います。

これからは、リサイクルのために、ごみをしっかり分べつしてすてたり、レジぶくろをへらすために、マイバッグを忘れずに買い物に持って行ったり、「食品ロス」をへらすために、がんばってきらいなものを残さないように食べたり、ぼくがごみの量をへらすためにできることを続けていこうと思いました。